

中村 海六郎（なかむら・かいろうろう）

1、プロフィール

昭和初期県内文壇にあって、小説、文芸批評、詩、短歌と多方面にわたり創作。その作品は 100 編を越え、黒石文学会の中心的存在であった。

<生没>

1903(明治 36)年1月1日 ~ 1938(昭和 13)年9月5日

<代表作>

新聞連載小説「花は紅」

<青森との関わり>

青森市生まれ。建部家より中村家の養子となり黒石に移り住む。病気のため東洋大学中退後黒石で創作に専念する。

2、作家解説

明治 36 年 1 月 1 日、青森市寺町に建部平七、やえの六男として生まれる。学齢に達する前に、建部家より黒石市中村家の養子となる。大正 8 年頃から文学に親しみ、弘前工業学校(現弘前工業高校第 1 期生)から東洋大学文学部に進むが中途退学。病気のため隻脚となり創作に専念する。与代海、海六澄、大川祥八郎等のペンネームを持つ。「万朝報」に文芸時評を執筆し、川端康成、平林たい子等 10 数人の批評を行っている。しかし、まもなく帰郷。「鍋の戯れ」「築く人々」等を執筆、その真摯な創作姿勢は高く評価され、県文壇一方の雄と目される。主に「地下室」「三角塔」「座標」「東北文学」に短編、詩、短歌を発表した。

昭和 12 年 2 月から東奥日報に「花は紅」(92 回)を連載。挿画は棟方志功。

黒石市の詩人、歌人である天内浪史との親交も深く、黒石文学会の中心的存在であった。昭和 13 年 9 月、36 歳の若さで病死する。三周忌にまにあわせて花田実の手で遺稿歌集『旅の石ころ』が謄写版で出される。地元では海六郎を「黒石の啄木」とも呼ぶ。

3、資料紹介

○中村海六郎遺稿歌集『旅の石ころ』

図書

1940(昭和 15)年9月5日

207mm×140mm

「黎明」「地下室」「三角塔」などに発表した海六郎の短歌 146 首の他に、天内浪史、一戸玲太郎、花田実らの追悼記が附録となっている。謄写本で黒石短歌会発行。